

令和2年度 かいじあむ古文書講座 第2回

おうちで古文書講座

# 甲州財閥・若尾逸平

令和2年5月23日（土）

山梨県立博物館 小畑茂雄

若尾逸平

逸平若尾  
時年九十有歳

# はじめに

みなさんこんにちは。  
学芸員の小畑です。



講師近影

(身分証の撮影で畏まっているだけで、怒っているわけではありません。)

今回も前回に引き続いて、  
「**おうちで古文書講座**」  
として、「くずし字」の  
世界をみなさんと楽しんで  
いきたいと思えます。  
おつきあいくださいます  
ようお願いいたします。

# まずはおわびを…

本来であれば、この古文書講座は、シンボル展「**生誕二百年・若尾逸平**」の初日を飾るイベントになるはずでしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、こうした講座だけでなく、シンボル展についても、みなさんのお目にかける機会を見送ることとなってしまいました。担当者として心苦しい限りですが、謹んでおわび申し上げます。

# がんばっていきましょう。

前回の海老沼学芸員も書いていたが、**こんなときだからこそ**、できるかたちで学びの機会を作っていくことが、とても大事なんだと思います。

必要な距離や自粛をとりながらも、まずはできることを、できるかたちで、次のステップが見えてくる時まで、みんなががんばっていきましょう。

# 若尾逸平さんについて

さて、今回の講座の対象の  
若尾逸平さんですが、こ  
んな人物です。

文政三年（一八二〇）十二月六日生まれ  
（※太陽暦に換算すると一八二一年一月九日に相当。）



伝記『若尾逸平』より

甲斐国巨摩郡在家塚村（現在の南アルプス市）の村役人若尾林右衛門（二代）の次男として誕生後、間もなく生母と死別。長兄林平（三代林右衛門）、継母に産まれた弟幾造と妹千代の四人きょうだい。

# 若尾逸平の生涯（数え年表記）

1 歳 12月6日生まれる。

2 歳 生母きの死去。

19 歳 剣客を目指して江戸へ上る。

父の願いで地元に戻る

22 歳 行商をはじめめる。

28 歳 小笠原村の若松屋に婿入り。



34 歳 離婚して生家に帰る。

36 歳 甲府八日町で再出発。

38 歳 細田はつと再婚する。

39 歳 弟幾造を商人に勧誘する。

40 歳 横浜での商売をはじめめる。

伝記『若尾逸平』より

# 若尾逸平の生涯 ②

43 歳 若尾機械を考案し製糸工場開業。

49 歳 町名主格となる。

50 歳 製糸業を廃し、山田町に転居。

53 歳 大小切騒動で焼き討ちに遭う。

55 歳 興益社設立に参加する。

57 歳 財産分与を行う。



伝記『若尾逸平』より

58 歳 一蓮寺県会の議員となる。

61 歳 明治天皇巡幸に際して拝謁する。

63 歳 価値下落の紙幣を大量借り入れ。

63 歳 第十国立銀行から栗原信近を追放。

66 歳 山梨県第一の地主へ成長。

# 若尾逸平の生涯 ③

68 歳 甲信鉄道計画に参加する。

70 歳 甲府市初代市長に就任する。

71 歳 貴族院多額納税者互選議員に就任。

74 歳 若尾銀行設立。

75 歳 家督を養子民造に譲る。

77 歳 東京電燈の株式買い占め。



伝記『若尾逸平』より

81 歳 開国橋架橋に寄附金。

82 歳 妻はつ死去。

88 歳 長禅寺に墓所を建てる。

愛宕山に寿像が有志に建てられる。

94 歳 大正2年9月7日逝去。

# 若尾逸平さんの人となり

少し長くなりましたが、資料を読んでいくうえで、**その背景となる情報を得ておく**ことは大変大事です。



伝記『若尾逸平』より

あと少しだけ、つぎは若尾がどんな人物だったかを見てみましょう。

# 粗食のお餅好き

食物に就ては少しも好嫌ひを云はなかつた人である。勿論奢る事は好まない。何でも一汁一菜あれば沢山として居た。夫人や幾久子が心を用いても「甘え<sup>うめ</sup>甘え」とばかり（略）又た餅、餛<sup>どん</sup>飩、蕎麦、蕎麦がきと云ふやうなものも多く用ひた、殊に**朝の餅と晩の蕎麦がき**とは、長い間の常用になつて居た、

『若尾逸平』（大正三年 内藤文治良著）より

最も老人に珍とするは、餅を好むこと異常な一事で、大概朝は海苔に巻いた**餅七切位**を平気で食ふ。碁を囲んで居る折の如きは、無意識の裡に餅を食ふこと驚くばかり。

『甲州見聞記』（大正元年 松崎天民著）より  
国立国会図書館・山梨県立博物館（甲州文庫）蔵

# 死にかけても囲碁が大好き

○若尾逸平、囲碁に酔ふ

若尾逸平、**囲碁を好むこと、三度の食事よりも太甚**はなはだし、一日大隈邸に於て、某客と烏鷺うろの争ひをなすや、敵手妙出殆んど防ぎ難し、逸平考案数時、遂に石を握りたる儘ウーンと昏倒して前後を知らざるに至る、乃ち水を吹き医師を呼び漸く息を吹き返へさしむ、後帰宅せしめんとするや、逸平曰く、『まア待つて下さい、今の勝負を片づけてから帰りましやう』

『名流百話』（明治四十二年 渡辺斬鬼編）より  
国立国会図書館蔵



# 五十の手習い

君幼年家道の頽零を享て、十分の学事を修するを得ず。壮歳以後は又多事にして、之を修するに違ちがあらざりしが、年五十歳に至り初て家政整頓し、小事は托するに人あるを以て文学に志し、**閑あれば則ち書を読み字を書し、**自から楽と為すに及にべり。就中、書は唐宋の古法帖を集めて之を学べり。故に気韻きいん遒勁しゅうけい冒す可からざるの達書にして、人之を求る者も亦少からずと。**年五十にして学に志ざす、**亦超凡の所あるを知るべし。

『山梨県人物誌 初編』（明治二十二年 平野文著）より  
国立国会図書館・山梨県立博物館（大木家文書）蔵

# 七十の手習い？

翁於いて七十歳となるや、倩々  
惟へらく、人間七十古来稀れな  
りといふも余已に其齡に達し、  
而して今後尚寿なるを得るは疑  
無し、既に財に於て望を遂げた  
れば一として遺憾なきも、心に  
慊らぬは幼少より学問せざりし  
事なり、いでや是より一字なり  
とも覚ゆることとせんと、老心  
此に奮ひて其翌日より手習道具  
を買調へ、いろはより習ひ始め  
ぬ。翁の意志の鞏固なる何事も  
実行を主としたれば、独り此習  
字に於てのみ非凡を見るにあら  
ざれども、当時猶ほ実業経営多  
忙にして席暖かなるの違なかり  
しと雖も、特に習字を以て貴重  
なる日課となし、毎日規則的に  
実行し、先づ一日に習ふ字は多  
き時は四枚折の唐紙百枚、少な  
き時は四十枚と定め、**平均一日  
の習字数二千五百字内外**を違へ  
たる事なし。

# 八十の手習い？

若尾の老人ほどの手蹟は、強ち世間に珍らしくも有るまいが、アノ高齡になつてから手習ひした一事は滅多に類例が得られない、老人が手習ひを始めたのは、世事を民造君に譲て、店の方一切を関はぬやうになつてからで、ヤ、**八十に手の届く頃から**だ、隠居所の二階に端座し、嘗て金儲に肺肝を碎いたと同一の苦心と精力とを以て琉球唐紙へセツセと臨摸したものだ。

『嗜好百種』（明治四十三年 服部太喜弥〈大夢〉著）より  
国立国会図書館・山梨県立博物館（赤岡重樹旧蔵資料）蔵

これら伝記のエピソードは誇張もありませんが、若尾の老いてもなおの向学心や、高齡に及んで書を良くしたことが分かります。

# 晩年まで続いた習慣

ここで冒頭の背景の写真を  
見てみましょう。



手本をもとに習字する最晩年の若尾逸平の姿  
山梨県立博物館蔵

# 九十の手習い

九十歳に差し掛かった最晩年に習字に取り組む若尾のすがたです。

まさしく字を記すことは若尾にとってライフワークとなっており、現在でも数多くの書簡や作品が残されています。



書 齋 の 若 尾 翁



→ 別アングルのすがたを収めた『若尾逸平』（前掲）の巻頭口絵収録写真

# 若尾逸平扇面

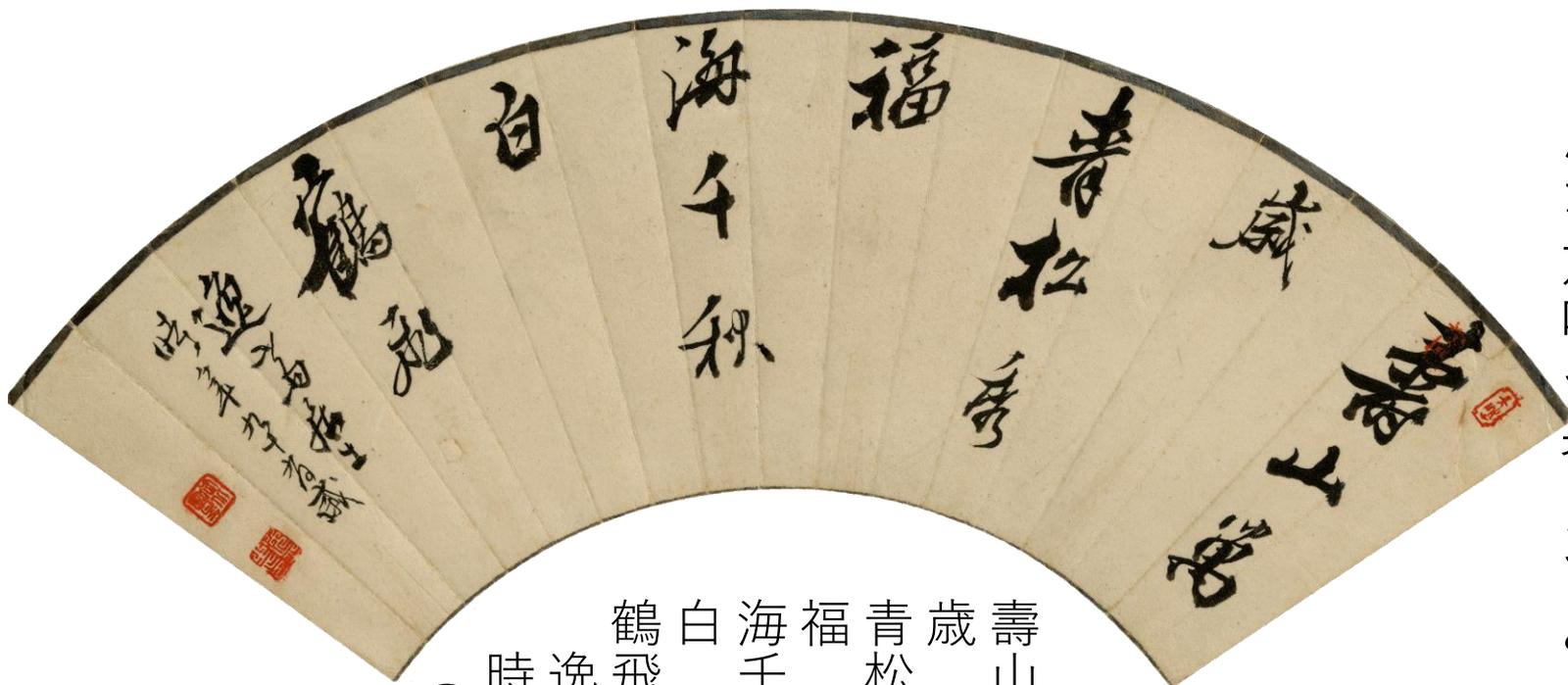


山梨県立博物館蔵

では、実際の若尾の字を実際に読んでみましょう。

余白に解説文を書いてみましょう。

# 若尾逸平扇面の解読



ちよつと癖のある字でしたね。  
どんな意味か考えてみましょう。

壽山萬

歳

青松秀

福

海千秋

白

鶴飛

逸齋居士

時年九十有歳

(印)

(印)

余白に解読文を書いてみましょう。

# 若尾逸平扇面を解釈する



山梨県立博物館蔵

全部で14文字ですね。七言の漢詩の一節と考えられ、縦書きに直すところになります。

壽山萬歳青松秀

福海千秋白鶴飛

寿山は万歳に青松秀で、福海は千秋に白鶴飛ぶ。とでも読むのでしょうか。

壽山萬

歳

青松秀

福

海千秋

白

鶴飛

逸齋居士

時年九十有歳

(印)

(印)

# 漢詩を手掛かりに読む①



山梨県立博物館蔵

鶴 白 海 福 青 歳 壽  
鶴飛 海千秋 青松秀 歳山萬  
逸斎居士  
時年九十有歳  
(印) (印)

著名な詩の一節であれば、仮に全文が読めなくても、解読できた文字列（例えば「寿山万歳」など）をもとに、若尾が使っているような手習いのお手本などをひもといたり、現代であれば**手っ取り早くインターネット**で検索すれば、ひとまず全文の文字を知ることが出来ます。残念ながら、この作品はあまり有名なものではないようです。

# 漢詩を手掛かりに読む②

「作品」から書かれた文字を解き明かすほか、文章構造から解読していく方法もあります。

壽山萬歳青松秀

福海千秋白鶴飛

色分けのように、この作品は対になる単語で構成されているので、一方で読めない文字があっても、ある程度の類推が可能となっっています。



山梨県立博物館蔵

壽山萬

歳

青松秀

福

海千秋

白

鶴飛

逸齋居士

時年九十有歳

(印)

(印)

# 漢詩を手掛かりに読む③



山梨県立博物館蔵

「寿山」と「福海」は対になる長寿を祝う言葉です。

・**寿山**【じゅざん】めでたい年、長寿のことを例えて言う。

・**福海**【ふくかい】福が海のように深いさまのことを言う。

いずれも私たちが日常的に使う語彙ではありませんが、**積極的**に辞書を使って調べてみましょう。

壽山萬

歳

青松秀

福

海千秋

白

鶴飛

逸齋居士

時年九十有歳

(印)

(印)

# 漢詩を手掛かりに読む④



山梨県立博物館蔵

壽山萬  
青松秀  
福  
海千秋  
白鶴飛  
逸齋居士  
時年九十有歲  
(印) (印)

「萬歳」と「千秋」も、対になる長い期間を示す言葉です。「萬歳（万歳）」は「ばんざい」とも「ばんざい」とも読め、それぞれに意味を持ってるので、**いろいろな読み方を想定すること**も必要となります。

「青松」と「白鶴」も色彩を含みめでたい長寿を寿ぐ言葉になっています。

# 漢詩を手掛かりに読む⑤



山梨県立博物館蔵

壽山萬  
 歳松秀  
 福  
 海千秋  
 白  
 鶴飛  
 逸齋居士  
 時年九十有歳  
 (印)  
 (印)

この作品では必要がありませ  
 でのたが、返読文字がある  
 戻つて読む文の字が「押韻」  
 ります。そのほかに「押韻」な  
 どの漢文の「ル」を知らないと  
 解読につながる場合もありません。  
 いずれにせよ、よく「語彙を調  
 する以前に読んで、よく「理  
 文章として読む、よく「理  
 うにすれば、読む、よく「理  
 を少しづつ詰めていくことが大  
 事になります。

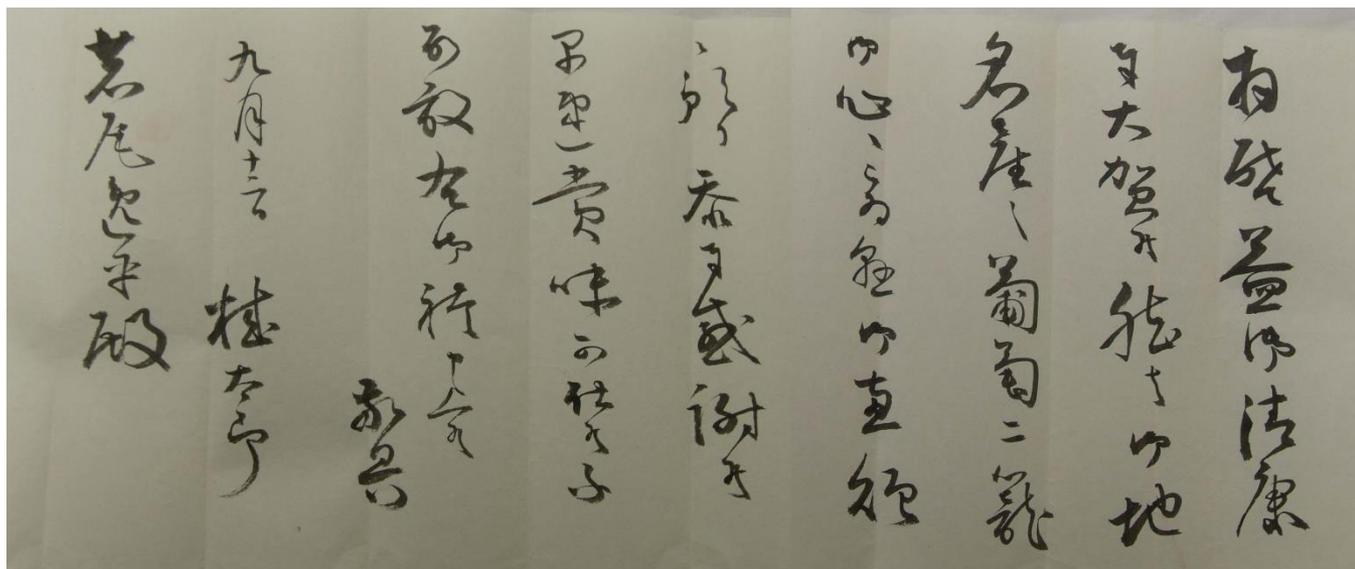
# 桂太郎からの書簡

続いて、くずし字の書簡を読ん  
でいきましよう。とはいえ、若  
尾の字はくせが強いので、まず  
は若尾宛の政治家の書簡を読ん  
でみます。



長州（山口県）出身の政治家で  
第11・13・15代内閣総理大臣  
を務め、西園寺公望と「桂園時  
代」を現出した桂太郎です。

# 桂太郎差出若尾逸平宛書簡

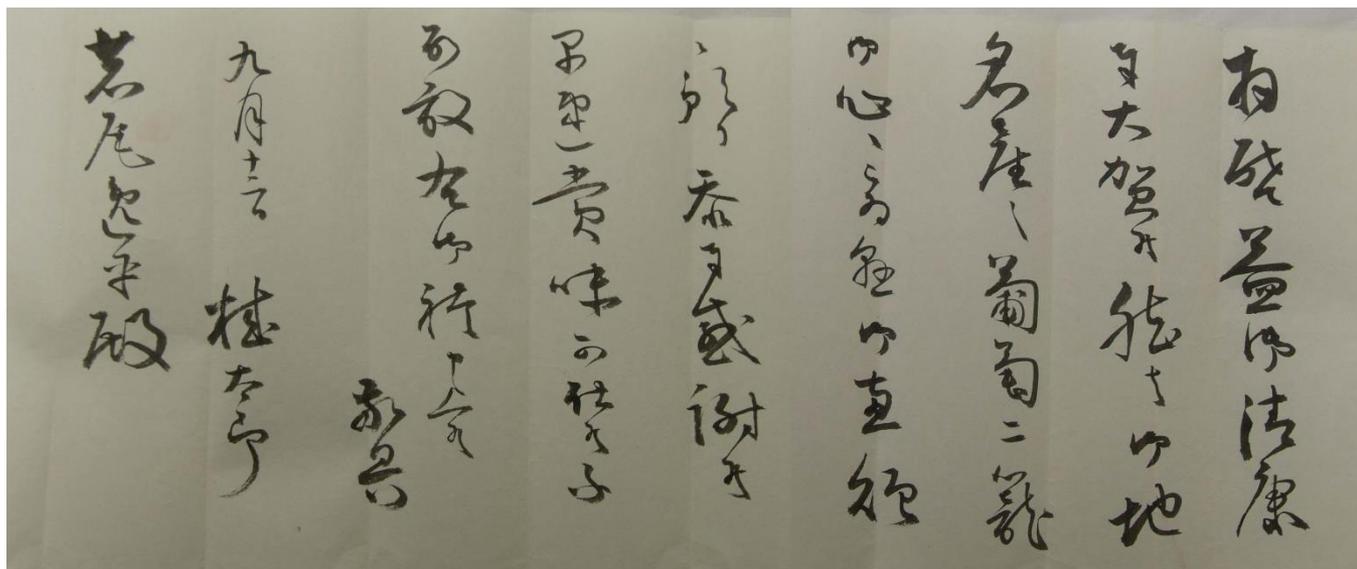


では、まずは読んでみましょう。

余白に解説文を書いてみましょう。

# 桂太郎書簡の文字の解読

解読は次のようになりました。  
さらに読みみてください。



拝啓益御清康

奉大賀候、然者御地

名産之葡萄二籠

御心二被為懸御惠贈

二預り、忝奉感謝候、

早速賞味可仕候、不

取敢右御禮申上候

敬具

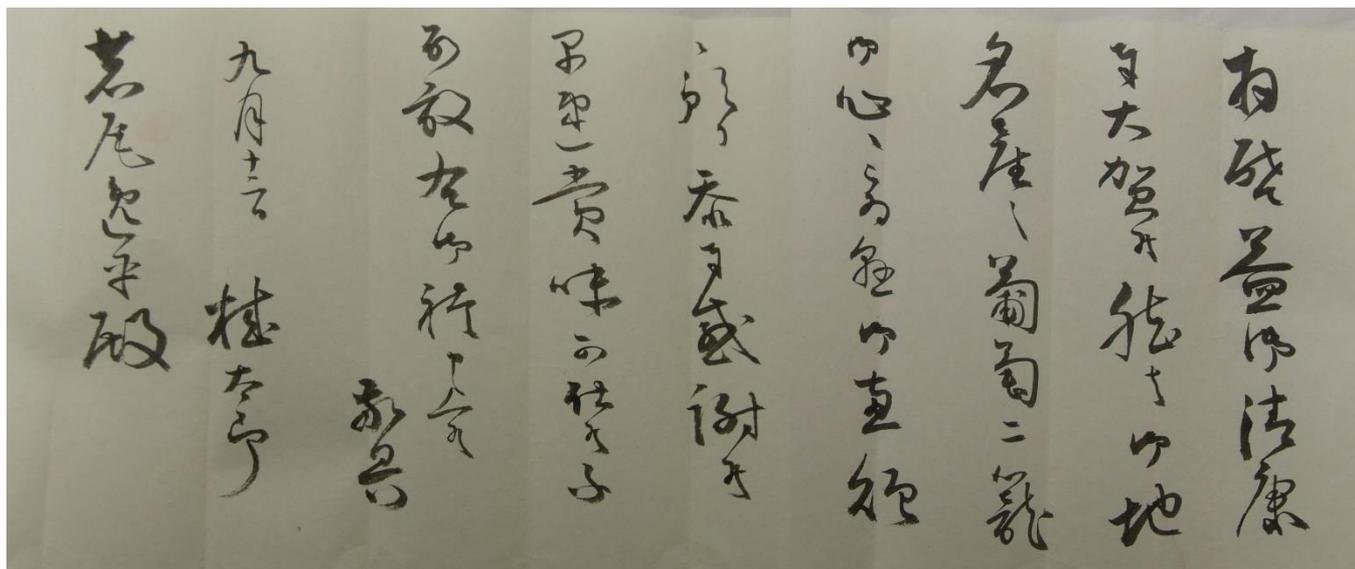
九月十二日

桂太郎

若尾逸平殿

# 桂太郎書簡の読みくだし

読み方の一例はこのようになりました。  
では頭から読んでいきましょう。



拝啓益御清康

(拝啓ますますご清康)

奉大賀候、然者御地

(大賀奉り候、然らば御地)

名産之葡萄二籠

(名産の葡萄ふた籠)

御心二被為懸御惠贈

(御心に懸けさせられご惠贈)

二預り、忝奉感謝候、

(に預り、忝く感謝奉り候、)

早速賞味可仕候、不

(早速賞味仕るべく候、)

取敢右御禮申上候

(取りあえず右御礼申し上げ候)

敬具

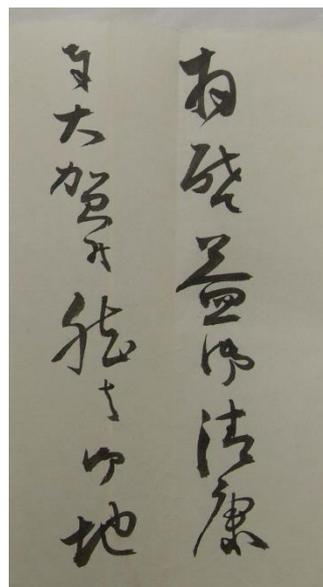
九月十二日

桂太郎

若尾逸平殿

# あいさつ部分の定型句

書簡の冒頭部分は定型的なあいさつ文であることがほとんどです。基本的な語彙や言い回しは覚えてしまうと、本文の解読へスムーズに入っていきます。



拝啓益御清康

奉大賀候、然者御地

- ・ 拝啓

- ・ 益 (ますます)

「愈々」など「さら

に」とか「一層」という語彙が入ります。

- ・ 清康

(せいこう)

「清穆」

「清祥」

「慶福」「清勝」「清安」といった相手の安全や健康を祝う言葉が入ります。

- ・ 奉

返読文字で後から読みます。

- ・ 大賀

(たいが おおが)

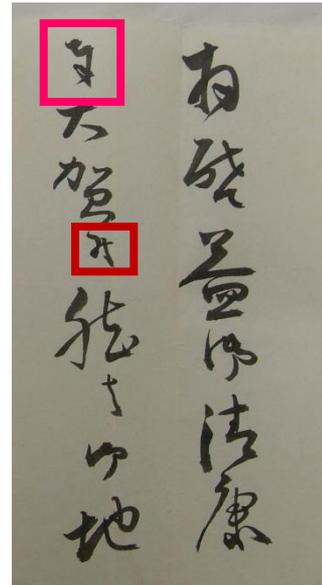
「賀」や「賀

上」といったお祝いの言葉が入ります。

- ・ 候

# よく出る文字とパーツ①

定型句以外の文字として頻出の文字は「奉」と「候」ですが、いくつつかの書き方のパターンがありますから、いくつつか覚えていきましょう。



拝啓益御清康

奉大賀候、然者御地

・奉

奉奉奉奉奉奉

奉奉奉奉奉奉

奉奉奉奉奉奉

・候

候候候候候候

候候候候候候

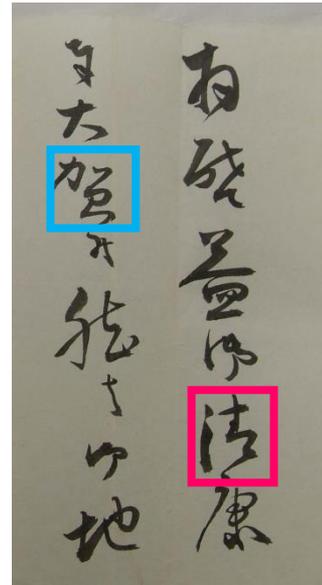
候候候候候候

候候候候候候

候候候候候候

# よく出る文字とパーツ②

部首や文字を構成するパーツのくずし方を覚えると、他の文字を読むうえで応用できます。ここでは「清」の「月」と、「賀」の「貝」の部分です。



拜啓益御**清**康  
奉**大賀**候、然者御地

・ 清

清清清清清  
清清清清清

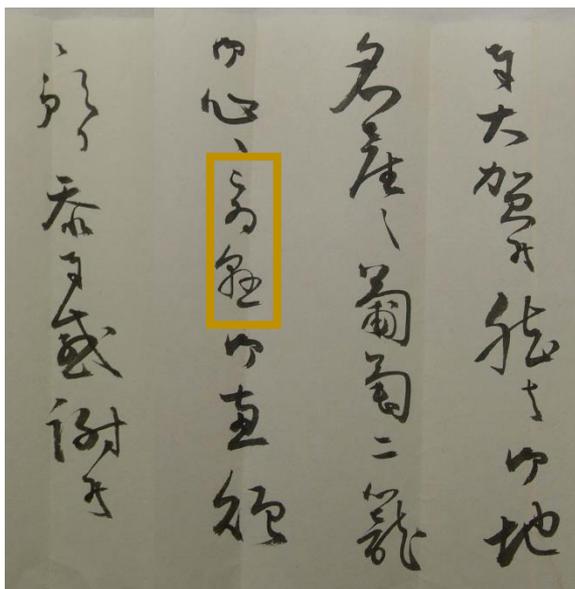
・ 賀

賀賀賀賀賀  
賀賀賀賀賀  
賀賀賀賀賀  
賀賀賀賀賀

いずれも「月」や「貝」の構えのなかの2画は省略されています。よく出るパーツなのでぜひ覚えてください。



# 本文前半の内容②



奉大賀候、然者御地  
名産之葡萄二籠  
御心二被為懸御惠贈  
二預リ、忝奉感謝候、

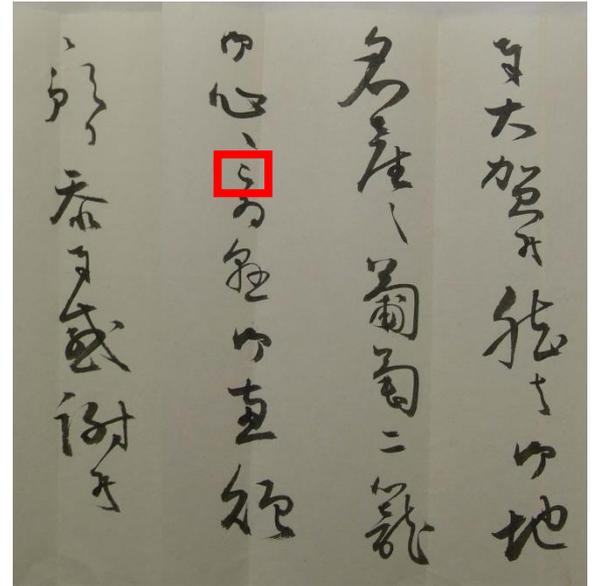
「御地名産之葡萄二籠御心二」までは  
ほぼ読めるのではないでしょうか。そ  
の後の「ヒ」「る」のような字は、返  
読文字の「被」と「為」で、その次の  
「懸」とあわせて読みます。

・被為懸 (かけさせられ・かけなされ) あとから読  
む「被為」は使役(させ)と敬意(られ)を意味  
します。まず「被」ですが、非常に多く  
出てきます。「ヒ」のようなものに行為  
の語彙が付いていたら、間違いなく「ら  
れる」だと読みましょう。

「為」は「ため」とも「として」とも読  
み、必ずしも返読文字ではありません。  
「為」の点4つや「懸」の「心」は1画  
(ほぼまっすぐな棒)に省略するのも、  
ほかの文字の解読に応用できる着目点で  
す。

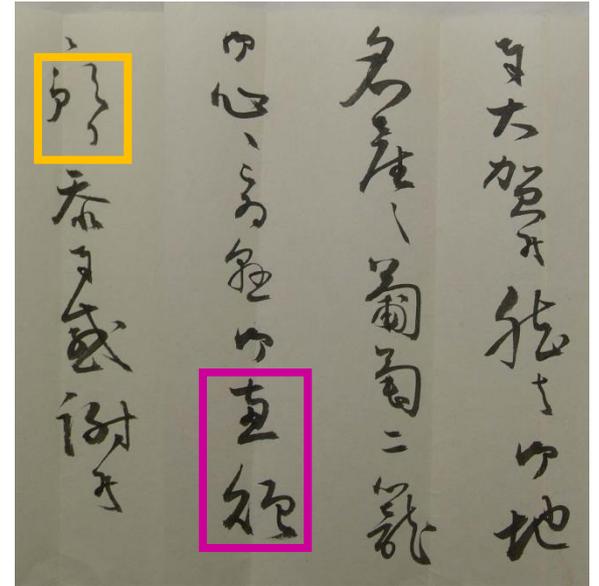
# 頻出する「被」

被被被被被被  
 被被被被被被  
 被被被被被被  
 被被被被被被  
 被被被被被被



奉大賀候、然者御地  
 名産之葡萄二籠  
 御心二被為懸御惠贈  
 二預リ、忝奉感謝候、

# 本文前半の内容③



奉大賀候、然者御地  
 名産之葡萄二籠  
 御心二被為懸御**惠贈**  
 二**預り**、忝奉感謝候、

・**惠贈** (けいぞう) 「贈与」を受ける相手を敬った表現ですが、ここでは「**惠**」のくずし方を見てみると、前のページの「懸」と同様に「心」が一直線の棒に省略されていることが分かります。次の行の「感」もです。「贈」は「貝」のへんを見てみましょう。前述の「賀」のパーツと同じですね。

・**預り** ここで注目したいのはつくりの「頁」です。ここも「月」や「貝」と同様に「目」の部分が大幅に省略されています。「**頁**」もよく使われるパーツなので、覚えていきましょう。

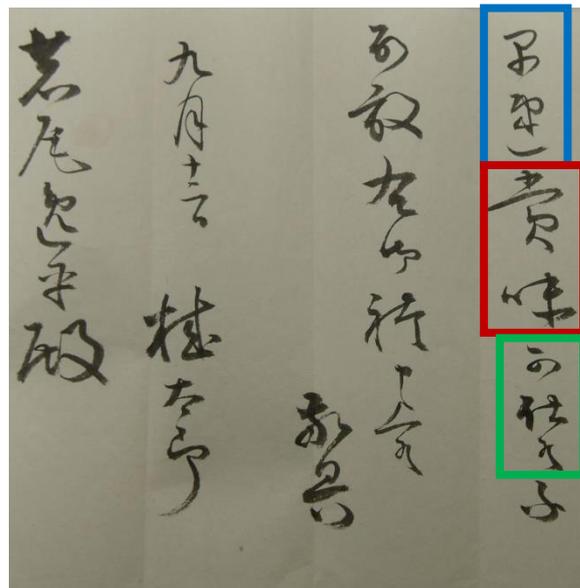
預 預 預 預 預 預

預 預 預 預 預 預

# 本文後半の内容①

では、本文後半の内容です。

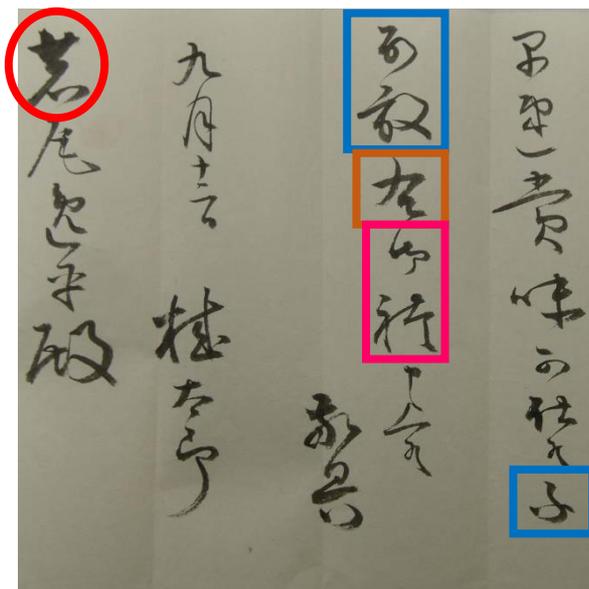
- ・ **早速** 「速」の「辶(しんにょう)」を見てみましょう。しんにょうは多くの場合「し」のように1画ではらうように書きます。
- ・ **賞味** 「賞」はまた「貝」のパーツが出てきました。一度出て来た文字を参考に、どんどん読んでいきましょう。
- ・ **可仕候** (つかまつるべくせうろう) ここでは返読文字の「可」を見てみましょう。古文書では出ないことはないほどの文字で、その分省略もはなはだしく、「一」に「、」だけ、という場合もあります。また「被」と同様、後ろに行を指示する語彙が付きますので、文章中の位置でも判読が可能な文字です。



早速賞味可仕候、不  
取敢右御禮申上候  
敬具  
九月十二日  
桂太郎  
若尾逸平殿



# 本文後半の内容②



早速賞味可仕候、不

取敢右御禮申上候

敬具

九月十二日

桂太郎

若尾逸平殿

・不取敢

(とりあえず)

返読する「不」

もよく使われる文字です。ひらがなの「ふ」の元となる字ですので、それを知っているのと読めるくずし方です。本来「横棒・左はらい・縦棒・右はらい」の筆順の「不」ですが、くずしの二画目にあたる部分は縦棒になっているところに注意が必要です。

・右

つづく「右」は筆順通り、「左はらい」から入るのが「左」との区別方法ですが、最終行の「若尾」の「若」のように、そのような筆順でない場合もありますので注意が必要です。

・御禮

(おんれい)

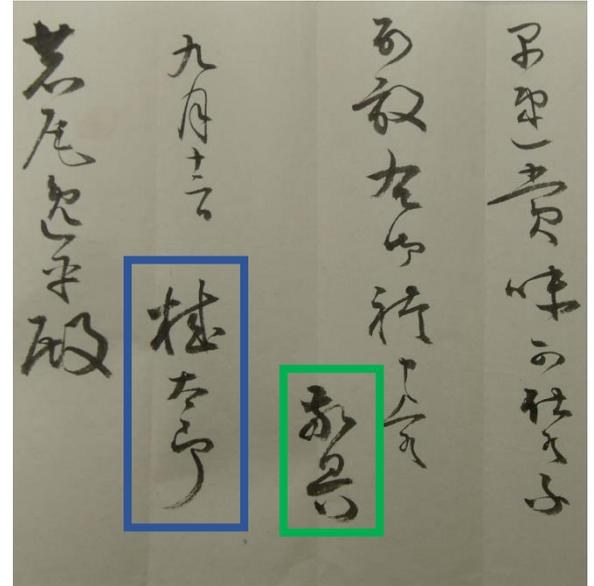
「禮」は「礼」です

が、このように古い字で書かれている文字にも注意が必要です。

# 本文後半の内容③

しが、と意「しうこと区を・桂  
 て、そ「頁にすと一別見太郎  
 いそ「て」もるが日がつみ  
 きこ「月判と似と多「のきま  
 まも「読」て今いの中ましこ  
 し注のβき度はのせよこ  
 意くすて「(おおざと)は  
 う。なしきま「頭注意1、ほ  
 ながらも似て「今としまが良ど郎  
 総的のう。ずしはうし省略は上郎  
 合的のの。お方に注  
 判にのですおざ

比もあ「一」や「ぼ・  
 較注草拝す敬「敬  
 し意ま々呈い具「具  
 なしす「」で「」  
 が「頭語」との判「の  
 なら「語」との判「の  
 読、し「の組み合わせ  
 しい「の組み合わせ  
 てく「の組み合わせ  
 い「の組み合わせ  
 つか「の組み合わせ  
 ま「の組み合わせ  
 可「の組み合わせ  
 能「の組み合わせ  
 う「の組み合わせ  
 を「の組み合わせ



若尾逸平殿

九月十二日

桂太郎

敬具

早速賞味可仕候、不  
 取敢右御禮申上候

# まぎらわしいくずし方

・郎

郎郎郎郎郎  
 郎郎郎郎郎  
 郎郎郎郎郎

・郎

郎郎郎郎郎  
 郎郎郎郎郎  
 郎郎郎郎郎

・良

良良良良良

「郎」のへん  
と見比べてみ  
ましょう。

ららららら

・明

明明明明明  
 明明明明明

・頭

頭頭頭頭頭  
 頭頭頭頭頭  
 頭頭頭頭頭  
 頭頭頭頭頭

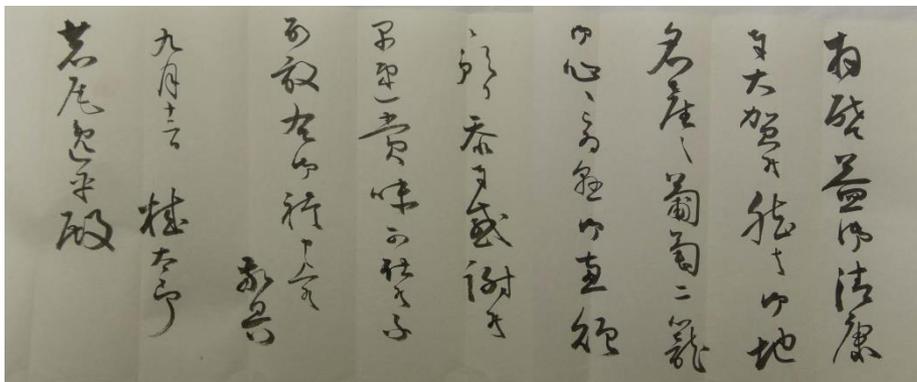
右の「郎」の  
二行目あたり  
の「B」のく  
ずし方とそっ  
くりですね。

「豆」へんは  
「良」とそこ  
まで似てはい  
ませんが、  
「頁」のくず  
しの違いは意  
識しましょう。

このあたりが  
一番「郎」と  
形が近いです  
が、出てくる  
場所も違う字  
なのと、つく  
りの筆のおど  
り方がややシ  
ンプルなのが  
見分けかたで  
しょうか。

# 桂太郎書簡の内容を取る

通して読んでみたところ、若尾逸平から贈られた甲州名産の葡萄**に対して桂太郎からの御礼状**だったことが分かります。甲州財閥の領袖であった若尾は、明治政府の最重要閣僚であった桂との交友関係があったことがうかがえる書簡です。



拝啓益御清康

(拝啓ますますご清康)

奉大賀候、然者御地

(大賀奉り候、然らば御地)

名産之葡萄二籠

(名産の葡萄ふた籠)

御心二被為懸御惠贈

(御心に懸けさせられご惠贈)

二預り、忝奉感謝候、

(に預り、忝く感謝奉り候、)

早速賞味可仕候、不

(早速賞味仕るべく候、)

取敢右御禮申上候

(取りあえず右御礼申し上げ候)

敬具

九月十二日

桂太郎

若尾逸平殿

# 難読の若尾逸平書簡を読む

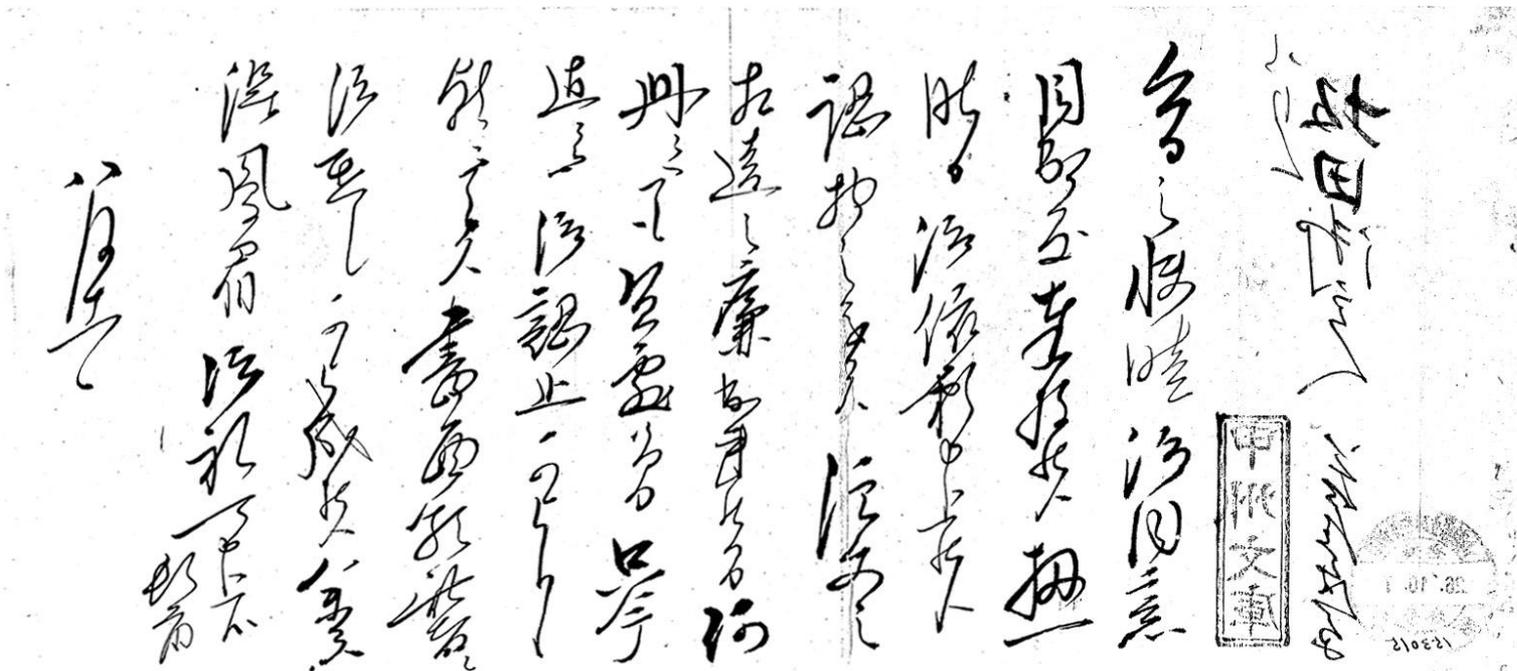


山梨県立博物館「巨富を動かす」展示室  
背景の中央線甲府開業記念式写真に写る緑門上「祝開通」の扁額は、若尾逸平の揮毫によるもの。

もうひとつ、今度は若尾逸平が記した書簡を読んでみましょう。先ほどの扇面はひとつの作品であり、手習いを重ねて書家を気取るほどに至った頃の「作品」とは異なり、もう少し若い頃の**日常的かつ実務的な書簡は非常に解読するのが困難な**ものです。では、難読極まる若尾逸平の書簡を読んでみましょう。

# 若尾逸平書簡（坂田御主人あて）

かなり癖が強い文字ですね。



# 若尾逸平書簡の解読案

解読案はこのような感じですか。

本日迄  
 申上候



今日之快晴御同意

今日之快晴御同意

目出度奉存候、扱一

目出度奉存候、扱一

昨日御依頼申上候

昨日御依頼申上候

認物之義者、注文之

認物之義者、注文之

相違之廉出来候間、何

相違之廉出来候間、何

れ二而も宜敷候間、只今

れ二而も宜敷候間、只今

迄二而御認止可被下候、

迄二而御認止可被下候、

就而者書面願此者二

就而者書面願此者二

御遣し可被成候、余者

御遣し可被成候、余者

得鳳眉御礼可申上候

得鳳眉御礼可申上候

頓首

頓首

八月十一日

八月十一日

余白に解読文を書いてみましょう。

# 若尾逸平書簡の読みくだし

読みくだしは左のとおりです。

本日迄  
 申上候



今日之快晴御同意

今日之快晴御同意  
 (今日の快晴御同意)

目出度奉存候、扱一

目出度奉存候、扱一  
 (目出度く存じ奉り候、扱一)

昨日御依頼申上候

昨日御依頼申上候  
 (昨日ご依頼申し上げ候)

認物之義者、注文之

認物之義者、注文之  
 (認め物の義は、注文の)

相違之廉出来候間、何

相違之廉出来候間、何  
 (相違の廉出来候間、何)

れ二而も宜敷候間、只今

れ二而も宜敷候間、只今  
 (れ二にても宜しく候間、只今)

迄二而御認め止め下さるべく候、

迄二而御認め止め下さるべく候、  
 (迄にて御認め止め下さるべく候、)

就而者書面願此者二

就而者書面願此者二  
 (就ては書面願此の者に)

御遣し可被成候、余者

御遣し可被成候、余者  
 (お遣わし成さるべく候、余りは)

得鳳眉御礼可申上候

得鳳眉御礼可申上候  
 (鳳眉を得て御礼申し上ぐべく候)

頓首

頓首

八月十一日

余白に解説文を書いてみましょう。

# 若尾逸平書簡の内容①

では2行ずつ読んでいきましょう。

目出度

今日之快晴御同意  
目出度奉存候、扱一

今日之快晴御同意

目出度奉存候、扱一

・快晴 「快」はもとのかたちをある程度保っていますね。「晴」の「青」の「月」は、ここまで言ってきたよりもさらに省略が進んでしまっています。

・御同意 「御」と「意」はなんとなく理解できますが、「同」は「目」にも「月」にも見えます。ここでは「意」との組み合わせが可能なもので、「同」と読んでいきましょう。

・目出度 「度」は「广（まだれ）」と「又」だけになります。「出」は「書」のくずしにも似ていて、案外判読しづらい文字です。

# 似ている「出」と「書」

・  
出

出 出 出 出 出

出 出 出 出 出

出 出 出 出 出

出 出 出 出 出

・  
書

書 書 書 書 書

書 書 書 書 書

書 書 書 書 書

このあたり  
のくずしだ  
とほぼ区別  
がつかませ  
ん。文脈で  
判断しまし  
しょう。

# 若尾逸平書簡の内容②

今日之快晴御同意  
目出度奉存候、扱

今日之快晴御同意

目出度奉存候、扱

・奉存候

(ぞんじたてまつりそうろう)

返読文

字の「奉」の下の「存」は1画目の横棒はかなり省略されているものの、左はらいと「子」がほぼそのままなので、「奉」の後にこのかたちが来たら「存」であるとわかります。

「候」は特徴のある書き方ですが、数多く出て来る文字なので、書簡を通して確認して読んでいきましょう。

・扱

(さて)

先ほど指摘したように、

ここから本文の内容に入るところに記される接続詞です。

# 「候」のパターン

候候候候候  
作作候候作  
候候候候候  
候候候候候  
候候候候候

・「候」の用例

今日もまたお花見  
今日もまたお花見

・若尾の「候」筆跡

若尾の書く候は○印の用例に近いが、筆の終わり方が異なり、やはり典型的なものとは言いがたい。

# 若尾逸平書簡の内容③



昨日か明日か

昨日

昨日御依頼申上候

昨日御依頼申上候

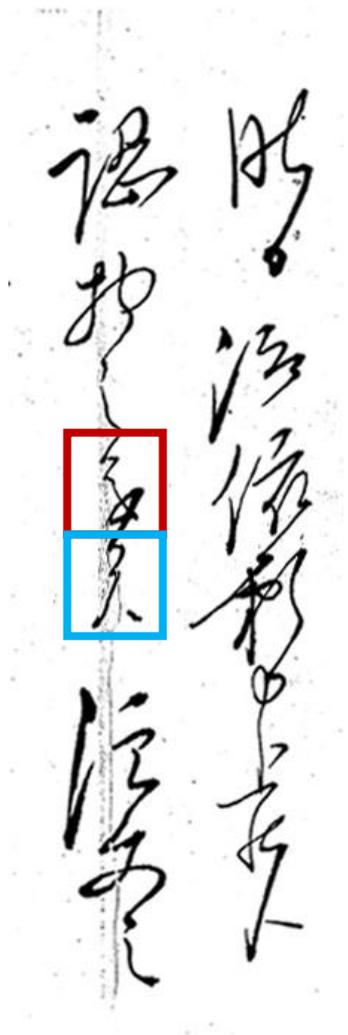
認物之義者、注文之

・ 昨日 「乍」がだいぶくずされてい  
ますが、次が「日」であるので「昨」  
か「明」だろうと想定できます。よっ  
て「乍」か先ほどくずしについて触れ  
た「月」との違いに着目します。

・ 依頼 「頼」の「頁」のくずしパ  
ターンに着目しましょう。

・ 認物 「認」は言べんのくずし方を  
覚えましょう。書き方はほぼ中国語の  
簡体字のようになります。「物」は  
「勿」の構えのなかの2画はほぼ省略、  
牛へんも手へんのようになることが多  
いです。

# 若尾逸平書簡の内容④



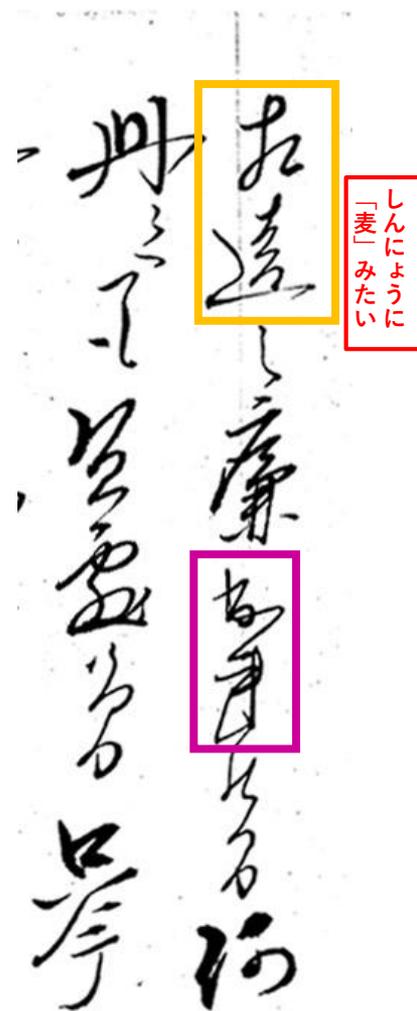
昨日御依頼申上候

認物之義者、注文之

・義 「義」も「〇〇の件」のような意味でよく使われます。「羊」の横棒2・3画目が省略され、「我」の左側が省略された**右斜めの文字**だと覚えてください。出て来る位置も、後に「に付き」であるとか、今回の「者(は)」を伴うことが多い、特徴があります。

・者(は) 変体仮名の「は」です。「土」と左はらいのあと、「日」を「、」に省略しています。

# 若尾逸平書簡の内容⑤



・ **相違** 「相」もよく出てきます。

「目」が相当省略されています。

「打」などとの区別は、前後の文脈でも判断しましょう。「違」はしんによ  
うのなか「韋」ではなく、このよう  
に「**麦**」のような字になる場合があり  
ますので、覚えていきましょう。

・ **出来** (しゅったい) 「出」は前に触れ

ました。この「来」も癖が強く、厳し  
い解読です。また、「**来**」は「**成**」に  
似た書き方になることもあるので、注  
意が必要です。

# 「来」と「成」

来

来 来 来 来 来

来 来 来 来 来

来 来 来 来 来

来 来

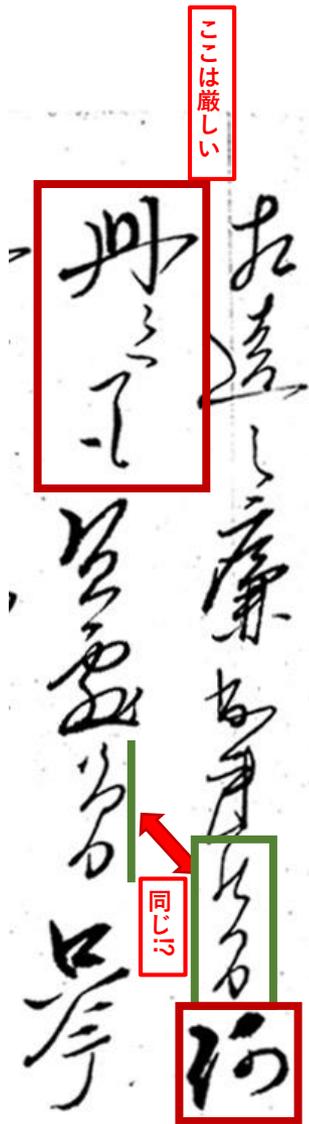
成

成 成

成 成 成 成 成

成 成 成 成 成

# 若尾逸平書簡の内容⑥



相違之廉出来候間、何  
れ二而も宜敷候間、只今

・候間 前に触れた「候」とかたちが  
違い、「仕(つかまつり)」とも読みたい  
かたちですが、読み方として適切でな  
いことと、「宜敷」の下にも同様の接  
続詞的な「間」を伴う「候」があり、  
若尾はこうしたケースではこのような  
「候」を書くのだと判断しました。

・何れ二而も (いずれにても) 〆〆〆も解読  
が難しいところ。 「れ」は「礼」  
の変体仮名と、カタカナの「ニ」と  
「も」の間は癖のある「而(て)」と判  
断しましたが、異論が出るかもしれま  
せん。

# 「間」と「れ」のくずし

難しいくずしですが、  
このあたりでしょうか。

・れ (礼・禮)

禮 禮 禮 禮 禮 禮  
れ れ れ れ れ れ  
れ れ れ れ れ れ  
れ れ れ れ れ れ

・間

間 間 間 間 間 間  
間 間 間 間 間 間  
間 間 間 間 間 間  
間 間 間 間 間 間

間

「門」構えはほとんど  
「つ」になります。

# 若尾逸平書簡の内容⑦

お遠くへ  
出で来る  
宜敷  
只今

相違之廉出来候間、何

れ二而も宜敷候間、只今

・宜敷 (よろしく) 何らかの依頼をする

古文書には必ず登場する語彙です。

「宜」は若尾のようにワかんむりのよ  
うになるケースがあります。「敷」は  
「西」や「雨」かんむりを乗せたよう  
な特徴的な字で覚えやすく、若尾のよ  
うに、へんから「方」を省いたパーツ  
が「女」の上に完全に乗っかり、左右  
構造の字が上下構造の字になっている  
場合もよく見られます。

敷 敷敷 敷敷敷 敷

敷 敷 敷 敷 敷

敷 敷 敷 敷 敷

敷 敷 敷 敷 敷





# 若尾逸平書簡の内容⑨

御遣し可被成候、余者

得鳳眉御礼可申上候  
頓首

御遣し可被成候、余者

得鳳眉御礼可申上候

頓首

・御遣し (おつかわし) 前述のように

「遣」はしんによろが「し」のように省略されています。この前に「此の者に」とあるので、かまえのなかは考慮せずに「遣わす」と判断しましたが、実際は、つくりのパーツの「中」の部分としんによろだけ、というところまでくずれ、ひらがなの「き」のようなかたちまでくずれている場合もあります。

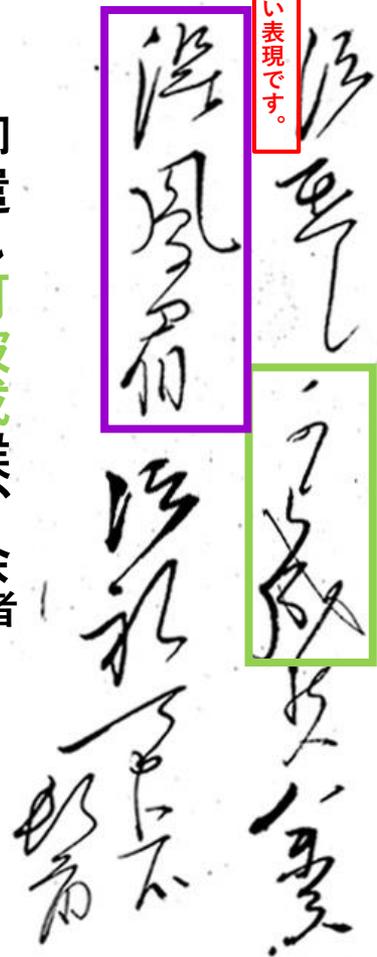
遣 遣遣遣遣遣遣

遣遣遣遣遣遣

遣遣遣遣遣遣

# 若尾逸平書簡の内容⑩

聞いたことがない表現です。



御遣し可被成候、余者

得鳳眉御礼可申上候

頓首

・可被成 (なされるべく) 「可」も「被」も前述のとおりです。「成(なる)」・「被(される)」・「可(べき)」の順番で読みます。「成」はほとんどくずれていませんね。

・得鳳眉 (ほうびをえる?) 本来「拝眉を得る」とすべきところの上級表現でしようか。「鳳」のなかの「鳥」の字は特徴的なくずしです。他の「𠂔(れんが)」やしたごころと同様に、一本の横棒だけに省略されています。「眉」の「目」も「口」のなかの2画と最終画の横棒が一体化していますね。

# 「頓首」の「頓」と「拝〇」

・頓

頓頓頓頓頓  
頓頓頓頓頓

・拝〇

「拝」のつく頭語・結語

【拝啓】

拝啓 除殿 拝啓  
拜而 方成 拜啓  
お法 拝啓 友五  
お成 お成 ほう

【拝呈】

お呈 拝呈 拜呈  
拜呈

【拝復】

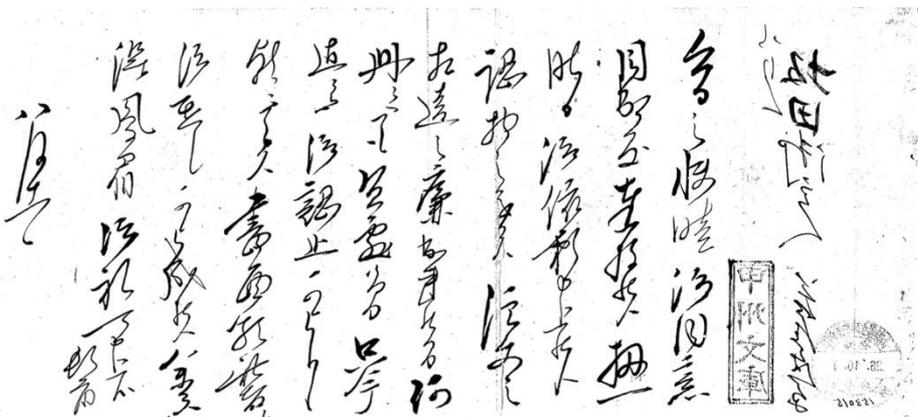
お復 拝復 拜復

【拜具】

お具 拜具 拜具

# 若尾逸平書簡の意味を取る

難しいくずし字の書簡でしたが、内容は坂田御主人（甲府の町年寄か）に何らかの書類作成について、修正点が生じたために作成の停止を要請し、この書面を持たせたものに預けてもらおうことと、次に面会した際にあとの処置と御礼を申し述べることを記したものとなっています。



今日之快晴御同意  
(今日の快晴御同意)

目出度奉存候、扱一  
(目出度く存し奉り候、扱一)

昨日御依頼申上候  
(昨日ご依頼申し上げ候)

認物之義者、注文之  
(認め物の義は、注文の)

相違之廉出来候間、何  
(相違の廉出来候間、何)

れ二而も宜敷候間、只今  
(れにても宜しく候間、只今)

迄二而御認止可被下候、  
(迄にて御認め止め下さるべく候)

就而者書面願此者二  
(就ては書面願此の者に)

御遣し可被成候、余者  
(お遣わし成さるべく候、余りは)

得鳳眉御礼可申上候  
(鳳眉を得て御礼申し上げべく候)

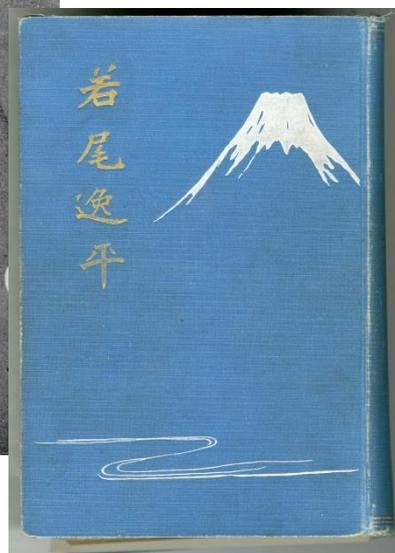
八月十一日

頓首

# お疲れさまでした。(´Д`)ノ~~オツカレ



伝記『若尾逸平』より



くずし字との格闘お疲れさまでした。  
古文書を読み解くことは難しいところ  
もありますが、「分かる楽しさ」やそ  
こにいたる鍵を見つけるお手伝いが出  
来て居れば幸いです。読んでいくため  
には、文字のかたちなど、「記号」と  
してのくずし字を覚えたり慣れたりす  
るだけでなく、背景となる歴史の物語  
や、語彙など日本語の世界に親しむこ  
とも重要です。  
ぜひ若尾の伝記も  
手に取ってみて  
くださいね。

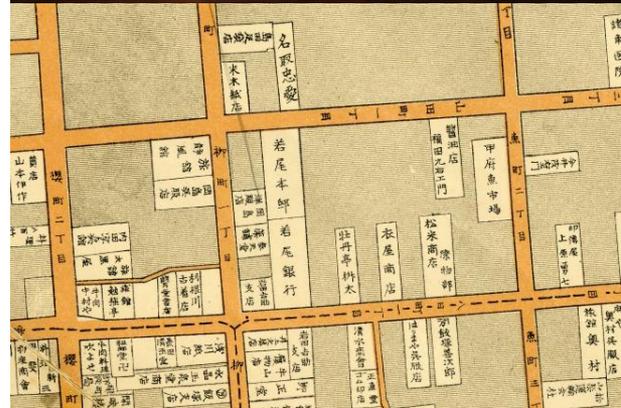
# おわりに

シンボル展「山梨の明治」  
(2018年)の若尾銀行前  
(甲府市八日町)にて

最後に甲府は八日町、若尾銀行前からお別れです。

若尾さんにまつわる古文書などを通じて、彼の足跡や人物像、近代史のなかで果たした役割などを知っていただき、興味を持っていただきたいと思います。

彼の生涯を取り上げた展覧会は見合わせになってしまいました。今後さまざまな機会ですら資料や調査研究の成果をご紹介しますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。



若尾銀行および本邸の位置（この地図は当館ホームページで閲覧できます。

[http://www.museum.pref.yamanashi.jp/4th\\_syuzousiryō\\_zoom\\_jissukokufuedu.htm](http://www.museum.pref.yamanashi.jp/4th_syuzousiryō_zoom_jissukokufuedu.htm))

# 生誕 200 年 若尾逸平

開催期間

シンボル展

金儲けは、発明が、株に關る。

発明は学問がなければ、容易なことではない。

株は運と気合だ。

若し、株を買ふなら、将来性のあるものでなければ望がない。

それは、『乗りもの』と『あかり』だ。

この先、世がドウ変化しやうとも、

『乗りもの』と『あかり』だけは必ず盛にごそなれ、衰へる心配はない。

『樹津筋伝』より

わかおいっぺい

コロナウイルス感染拡大防止のため  
中止となりました。

しっかりとマスクを！



伝記『若尾逸平』より

←はなれて！→

ソーシャルディスタンス

山梨県立博物館  
Yamanashi Prefectural Museum

〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1 電話055-261-2631



窓を開けて換気も

まだ大変な時期が続くが、  
力をあわせて乗り越えて、  
いつの日かまた会おう！

肖像写真は伝記『若尾逸平』より